



特集「自然共生とビオトープ」の編集にあたって

地球環境保全や循環型社会の構築とならんで、「自然と共生する社会の実現」は、わが国の望ましい環境を創造するうえで、取り組むべき重要な課題の1つとされている。生物多様性保全の観点から望ましい自然環境を積極的に確保すべく、身近な自然の保全や失われた自然の再生・復元を目的とした国レベルでの取り組みが展開されることとなろう。また、そのなかで、市民参加型の自然再生活動も重要な位置を占める。

一方、ビオトープの保全・創造、ミティゲーション手法の開発は、こうした自然再生を推進するうえで重要な考え方であり、かつ具体的な手法である。自然復元や身近な自然の保全を意図して、ビオトープの保全や整備が展開されるようになってから10年以上が経過しており、社会的にも定着しつつある一方で、ややもすると自然や地域の文脈を無視した商品化・画一化されたビオトープ整備に陥りがちであり、生物多様性保全の観点からは不十分、との意見も多く聞かれるようになってきた。

こうした経験を生かすべく、さまざまな切り口からこれまでのビオトープの保全や整備について点検するとともに、自然再生活動への展開方向や新たな技術について検討する必要がある。本特集では、まず、「ビオトープづくりで生物・生態系は豊かになったか」という視点で、日本でのビオトープ概念の発信と展開に長年かかわってきた生態学に関連する学術分野からビオトープのあり方を点検する。つぎに、「新たな技術」として注目される自然復元・再生技術や評価技術を紹介する。そして、「市民活動によるビオトープ創造」の視点から、学校ビオトープ、ビオトープ学習、田んぼの学校、里山管理、グラウンドワークトラストを取りあげ、ビオトープ保全・創造や環境再生のための、市民活動やパートナーシップのあり方について考える。

なお、本特集は、生物多様性そのものにかかわる議論を深める構成にはなっていない。生物多様性国家戦略の見直し作業も最終局面を迎え、自然共生との関係からも重要なキーワードではあるが、逆に、大きなテーマであることから、上記の趣旨におさまりきれないと考えたからである。

(担当編集委員 井手 任・糸長浩司)